

# 「小さく生まれた赤ちゃんを持つお母さんへの対応と、後期早産児の注意点について」



〈プロフィール〉  
埼玉医科大学総合医療センター  
総合周産期母子医療センター  
新生児部門 教授  
加部一彦先生

## 小さく生まれた赤ちゃんの授乳支援は お母さんの心と体の回復状態をよく見て対応を

近年、出生体重2,500g未満で生まれる低出生体重児の割合は、増加傾向にあり、「早産などで小さい赤ちゃんを生んだお母さんをどのようにサポートしていくか」が、医療現場における課題の1つになっています。

お母さんは出産や手術を終えて、体力的に非常に辛いときに「小さく生んでしまった」という自責の念や「無事に育てられるかしら」という漠然とした不安を抱えています。そうした心身ともに不安定な時期に、医療従事者が「赤ちゃんも頑張っているのだから、お母さんも頑張ってください！」などと叱咤激励すると、なかにはプレッシャーやストレスを感じて眠れなくなったり、自分に自信がもてなくなり自己嫌悪に陥ったりするなど、軽い鬱状態になる方もいます。

そのため小さな赤ちゃんを生んだお母さんの場合には、特に心と体の回復状態をよく見て対応する必要があります。授乳支援の際も、赤ちゃんの飲み方や抱き方、授乳後の体重増加ばかりを話題にして、お母さんを追い込まないことも大切です。小さく生まれた赤ちゃんも、母乳で育てることが原則のため、お母さんが挫けないように丁寧な授乳支援を行ってください。

## 発育の遅れについては お母さんだけでなく家族にも説明しましょう

小さい赤ちゃんを生んだお母さんが、退院後に心配するのが発育・発達の遅れです。そのため入院中に、発育・発達について話す機会を設け、早産の赤ちゃんの場合には、「発育・発達の目安は修正月齢を意識して下さい」と説明しておきましょう。

特に小さい赤ちゃんを生んだお母さんは、体重をまめに計って「増えない」と落ち込む方が多いので、「体重は1週間に1回程度測れば十分」「発育曲線の標準範囲に入らなくても、その子なりのペースで成長していれば大丈夫」と伝えてください。

また運動発達の遅れについては、お母さんだけでなく、おじいちゃん、おばあちゃんが心配して色々言うケースがあるので、できればお母さんだけでなく家族にも「発育は、もともと個人差があるもの。決して周りの子と比べて焦らないように」と説明しておくのが良いでしょう。

## 後期早産児は、体重2,500g以上でも注意が必要 正常産の赤ちゃんと同じように考えないで

早産児のケアで見落としがちなのが34～36週（後期早産）で生まれた赤ちゃんです。後期早産児でも体重が2,500g以上あると、医療現場では正常産で生まれた赤ちゃんと同じように扱われがちです。しかし早産により心肺機能や体温調節、免疫などが未熟な状態の場合もあり、中には経口哺乳に必要な吸着、吸啜、嚥下の協調運動が未発達で、母乳の飲み具合が悪い赤ちゃんや体温調節がうまくいかない赤ちゃんもいます。そのため出生体重だけを見て「問題なし」と決めつけてしまわないことが大切です。

お母さんにも後期早産児の注意点を伝えて、退院後、おっぱいが十分に飲めず、工夫を繰り返しても体重の横ばい状態が継続するなど、気になることがあれば、小児科を受診するように勧めてください。